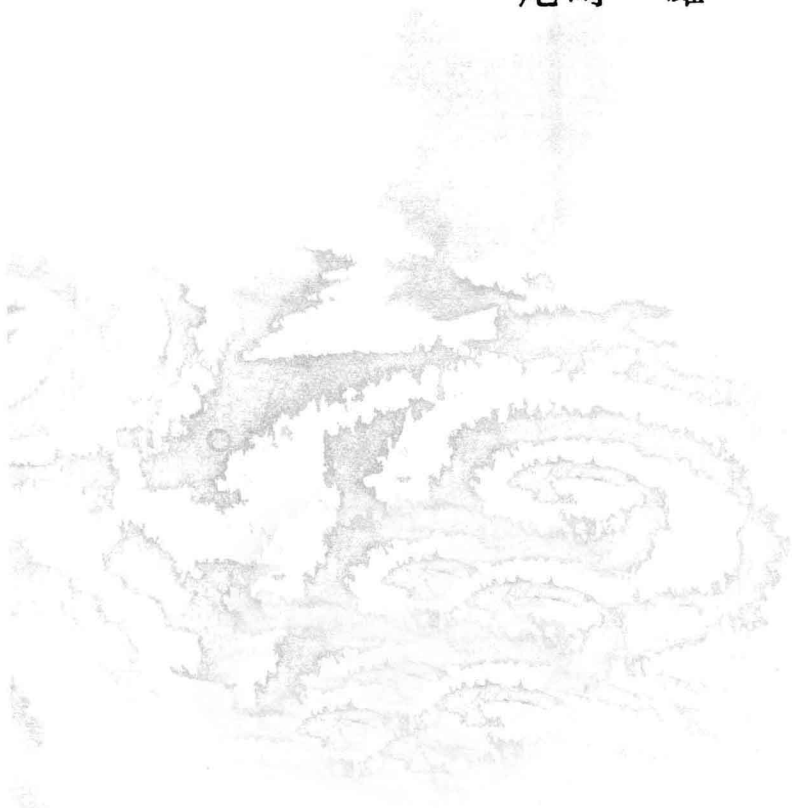




まぼろしの記

尾崎一雄



講談社

まぼろしの記

著者の了解により
検印廢止

© 尾崎一雄 一九六二

昭和三十七年十月二十日 第一刷發行

二八〇圓

著者 尾崎一雄

發行者 野間省一

印刷所 豐國印刷株式會社

發行所 株式會社 講談社

振替 東京 三九三〇
電話 大塚側大代表 三一二一

落丁本・亂丁本はおとりかへいたしま

目次

まぼろしの記

五

夢

蝶

一二五

表紙・扉
大山忠作

まぼろしの記

一

挿木や根分けは勿論だが、種子から育てた木でも、十年経つと結構大きくなるものだ。敗戦の前年、病氣のため、長い東京生活を切り上げて郷里へ引込んだ私は、何もすることが無いので——といふより、何をする體力も氣力も失つてゐたので、窓からその邊の木や草をぼんやり眺めてばかりゐた。三、四年さうしてゐるうち、漸く病床から離れることが出来た。

草履をはいて、久しぶりに屋敷うちを歩いたときは、嬉しくて、宙に浮いてゐるやうな氣持だつた。そしてまた、足は實際、宙に浮いてゐるやうだつた。大丈夫だ、といふのについて歩く家人や子供の手前、宙に浮くやうな氣持は押しかくしたが、足の方はご

まかせなかつた。私の足は、ふくらはぎは勿論、大腿も、膝の骨より細くなつてゐたのである。

だが私は、雨さへ降らなければ、必らず屋敷うちをうろついた。十分か十五分でもう疲れ、いつも敷いてある床にもぐり込んで一時間も二時間も休む。それが、慣れるにしたがつて、二十分、三十分の散歩に堪へるやうになつた。それにつれて、大腿やふくらはぎに、少しづつ肉がついてきた。私は少し慾が出てきて、それまで放りつばなしにしてゐた木や草に手を出し始めた。今から十二、三年前のことだ。

その時分挿木をしたり、種子を播いたりした木が、もう大分育つてゐる。種類によつて遅速はあるが、今はとにかく一本の樹として存在を主張してゐる。

それらのいはば「戦後派」の木は、昔からの老木に入り交つて、活氣あふれた葉の色を見せてゐる。彼らは單に木であつて、植木ではない。三抱へもある玉樟の大樹を初め、直径二尺以上のあけぼの梅その他、私が生れるずっと前からこの屋敷にあつた樹々に比べれば、全くものの數ではない。が、私はそれらの若い木に、特別な關心をもつてゐる。

る。なぜなら、彼らは私が居なければ木にならなかつた筈だからだ。彼らに木としての生命を與へたのは私だ、と云へる。——少し大げさな云ひ方かも知れぬが、彼らは私の子供みたいなものだ。彼らのあるものはもと、親木から剪り取られた小枝であり、あるものは、枝頭から落ちた小さな實だつた。けれども彼らの有つ木たる素因に縁として働きたのは私だ。私が適當に處理しなかつたら、彼らは枯枝となり、死實となつたらう。……かういふと、やはり大げさになるが、つまり私は、自分がいつたんは「死ぬかも知れぬ」と半分覺悟した病氣から立直つて、ひ弱いながら新芽をふき出した同じ時期に、木としてのスタートを切つた彼ら若木を、他人(?)としては見られぬ氣持があるのだ。多分、再生の喜びがさせる感傷なのだらう。

それはそれとして、彼ら若木どもの、この威勢の好きはどうだ。中でもひどいのが、枇杷だ。四本のうちの一本は、屋敷の東側境界近くにあつて、隣家の畠の肥料を存分に吸ふためだらう、三間もの高さになり、枝葉をぎつしりと繁らせてゐる。他の三本と比べ、幹に對する枝の角度が小さいのは、成長の猛烈さを示すものだ。四年ほど前から、

實をつけ出したが、實生のままのくせに、先祖がへりもせず、甘美な大きい實を澤山つける。

未だ私が寝てゐる時分、ある人が見舞に枇杷を一籠くれた。その實を窓から抛つた奴が、翌年芽をふいた。うまい枇杷だったので、家人にいひつけそれらを適當な個所に移植させたのである。

それを見た近所の人たちは、厭な顔をして、

「扱いでしまひなさい、屋敷うちに枇杷は不吉です。植ゑた人が死なないと實をつけな」と云ひます」さう忠告してくれた。だが、私はそのままにしておいた。さういふ云ひつたへは私も知つてゐた。近所の人は、長患ひの私を知つてそんなことをする筈はないと思つたのだらうが、私は、いはゆる荷ぎ屋ではない。枇杷の結實期が遅いのをそんなふうに云つたのだらうと解釋し、自分がこの幼木の實を食へるやうだつたら面白い、と思つただけだ。十年経つて私は生きて居り、枇杷の實を食つた。今年も青い實を大分つけてゐる。明日のことは判らぬが、やがて熟したその實を、多分食ふことになるだらう。

二

五月初旬のよく晴れた午前、私は家の北側の板塀添ひに、草むしりをしてゐた。梅、柿、肉桂、槇など大小さまさまの木が雜然と立つてゐる下に、葉蘭や茗荷が繁つてゐる。それに交つて、藪枯（やぶがらし）が一尺二尺とのび上つてゐる。こいつにはびこられてはたまらぬから、目のかたきにして引抜くのだが、たくましい地下莖を縦横に張りめぐらしてゐるので、根絶やしにするのは大變な仕事だ。

未だ朝露の残つてゐる葉蘭や茗荷の繁みをわけて藪枯退治をつづける私の耳に、女の聲が飛び込んだ。

「山根のお静さんは、實家へ歸つたとよ」

「へえ、たうとう——」

「おテルさんもおテルさんだけんど、英太も英太だ」

向う三軒兩隣りと云つても、田舎のことで家そのものは離れてゐる。私方の上隣りの

屋敷は二千坪もあらうか、その南側は私方と小道をへだてて長い石垣になつてゐる。石垣の上には東西に長く茶の木が植ゑられ、それが生垣になつてゐる。毎年五月になると茶摘みに近所の女達を頼む。それで年間自給自足とのことだが、その茶摘みが始まつたのだ。

誰と誰なのかは、聲で判つた。北川ハツと鎚木ミヨ、ともに近所の細君だ。ハツは五十位、ミヨは四十二、三か。二人は、自分たちの居る石垣下の道を五六間いつた先の堀かげに私が居るとは知らず、山根英太お静夫婦と酒部テルとのもつれについて聲高にしゃべる。田舎の五月の、晴れた午前で、あたりは閑寂だ。すべては筒抜けである。四十と五十の、いはば古女房たちの言葉づかひは、この上なく露骨で、聞く方が大儀なほどだ。私は、一と休みしていい頃だったので、立上つて腰をのばし、氣づかれぬやうにその場を去つた。

「藪枯がさかんに出てきた」

茶をのみながら妻に云つた。

「ああ、あの蔓草——。あれ、カラシの一種ですか」

「カラシぢやないさ」

「だって、ヤブ茗荷、ヤブ柑子なんてのもあるでせう」

「違ふんだ。あいつがはびこると、竹藪さへ枯らして了ふと云ふ。つまり藪を枯らすほどの悪草といふわけだ」

「へえ」

「貧乏づる、垣通し、なんて異名もあるぐらゐで、餘ほどの嫌はれものなんだ。確かにあいつは、生活力極めて旺盛だから、退治するのは大變だな。君も見つけ次第引抜いてくれ」

云つてみると、いきなり屋外有線放送のテーマ音楽が鳴り出した。いつも乍らボリュームが大きすぎる。向ひ合つての話も中絶した方がいいほどだ。

「久保山へ行つて居られる北川傳三さん、豚が逃げましたから至急お歸り下さい——繰り返します、久保山へ行つて居られる……」

「豚がまた逃げ出したんだ。傳三は山へ行き、おハツが隣りの茶摘みで、家はからつばか」

「あ、お隣りでは茶摘みですか」

「おハツさんと鐺木のおミヨさんが、さかにしやべり乍ら摘んでたよ。今の放送で、おハツは慌てて駆け出したらう」

「この前も、近所の人たちがあの豚を一時間も追つかけ廻したんですよ」

「茶を摘みながら、例の山根英太と酒部テルのスキヤンダルをさかに討論して居た」

「面白いこと、云つてたでせう」

「英太の細君が子供を連れて實家へ歸つたいきさつを詳しく話してゐた」

「へえ、たうとう別れ話ですか」

「酒部テルつてのは、大したものらしいね」

「あの人は、あれが病氣なんですよ。どうにもしやうがないらしいの。——でも、道で逢ふと、快活で愛嬌があつて、ちつともそんなふうには見えないけど」

「さうかね。さてもう少し——」と私は立上った。

「もうお止めになつたら？　冷えちやひますよ」

「大丈夫だ」

さつきの場所へ行つてみると、茶摘みの二人は居なかつた。慌てて駆け出すハツのあとを、野次馬氣分でミヨも追つたのだらう。私は、薙枯の蔓を抜き、地下莖を引きちぎり乍ら、山根英太と酒部テルとの色戀沙汰について、ぼんやり考へてゐた。

酒部テルは四十位の後家。敗戦間際に戦死した亡夫との間に、男女二人の子供がある。田畑合せて一町二、三反といふ中農だつた。

女一人では當然手が廻らぬので、近所の人たちが時々手助けしてゐた。山根英太も暇をつくつては手傳ひに行つてゐたが、いつかテルとねんごろになつた。英太は二十幾つといふ若さだつたが、すでに隣村から二十前の嫁を貰ひ、もう赤ん坊もあつた。だが、當時三十いくつだつた酒部テルに強く惹かれ、やがて、自宅よりテルの家で寝る方が多くなつた。

兩親はじめ、親類一統の強意見も、英太とテルには全く通じなかった。

テルは亡夫の遺産たる田畑をつぎつぎと手離しては、英太の酒代にした。毎日、肉や魚を買った。夜は早寝をし、朝はどこよりも遅く戸を開けた。

村人たちの評判は、勿論よくなかった。物笑ひの種になった。だが、當の二人、殊にテルは平然としてゐた。それどころか、いつも張りのある顔つきをしてゐた。

二人が山の蜜柑畑でむつまじく辨當を使つてゐるのを、通りかかった二三人の青年が、奇聲を擧げて冷かした。するとテルは、

「口惜しけりや、眞似をしてみろ！」と大聲で怒鳴り返した。青年たちは、二の句がつけず、こそくと逃げ出した。

さういふ關係がここ何年かつづいた擧句、英太の細君はつひにあきらめて實家へ戻つたといふのだ。

一應の結着を見たこの事件は、そもくから村人の話の種になつてゐたので、自然私も耳にはしてゐた。だが、英太もテルも、英太の若い嫁も、逢つたことが無いので——同